

# 〇・シュリユーター覚書き

—いわゆる「景觀論」と「時間の克服」を中心にして—

浜 谷 正 人

## 目 次

はじめに

一、青年シュリユーターの二論文

二、シュリユーター地理学の問題点

三、「景觀」の因果的解明

四、方法としての「時間の克服」

は じ め に

この小論では、シュリユーター地理学の方法論的基礎を、その中心概念である「景觀」、方法としての「時間の克服」を中心にして再検討してみようと思う。それは今日までのシュリユーター理解に少なからぬ不満をいただくからである。かれの地理学方法論は今日の水準からみれば、確かに古く、その内に多くの欠陥と限界を蔵している。だが、シュリユーター地理学を単なる学説史上の一理論に落としてしまいたくない。たとえ過去の一理論として封じ込

めるにしても、その封じ込め方を重視したい。切り捨て方によって、その後の地理学の展開の仕方が大きく左右されるだろうからである。

周知のようにオットー・シュリューター (Otto Schlüter 一八七二—一九五九) は、草創期のドイツ人文地理学の分野で優れた方法論上の研究を行ない、二〇世紀の初頭以来、いわゆる「景観地理学」としてドイツのみでなく世界各国の地理学界に大きな影響を与えた、学史上でも重要な人文地理学者の一人である。かれの地理学は今日、ドイツ地理学の主流となった地域生態学派、更には最近隆盛はなほだしいマルクス主義地理学者によって完全に批判・克服されたかに見える。主として第二次大戦後に展開された批判の多くは、確かに正鵠を射ていることは否定できないが、なお十分に検討すべき問題点を孕んだ批判も少なくない。たとえば、かれの地理学を平板な形態論と規定する地理学者が多いが、この点今少しシュリューター地理学を詳細に検討してみる必要があるはいしないだろうか。かれは「景観」の皮相な把握・記述に終ることなく、景観現象の形成要因を常に探究しようと努力しているからである。地域の肉眼に映ずる可視的な現象、すなわち景観現象の因果的説明、これこそ彼が目ざすものであった。この意味で、かれの地理学を皮相な、内容を欠落させた単なる形態論と断定することは再検討を要するように思われる。

シュリューター地理学の理解や批判が不十分であるという事は、伝統地理学や歴史地理学についても言えそうである。たとえば、「景観」を単に地域研究の緒口と見做したり、あるいは内部構造にいたる手懸りとすることは、その是非はともかくとして、少なくともシュリューターの意図とは違っている。かれにとっては「景観」はもっと積極的な役割を果しているのではないか。第二次大戦後、かれの地理学の方法・課題を発展的に継承して、景観発生学や機能主義的な景観論が展開している。「景観」あるいは景観現象の重視、それは結構であろう。景観現象はすぐれて地理的現象であるからである。だが、「景観」の重視のあまり、単に景観現象の精緻な分析、たとえば計量的手法を駆使しての景観分析に終ったり、景観現象そのものの内に独自の形成要因、運動法則が存在すると考えることには若干

の疑問が残る。「景觀」として認識される現象、すなわち狹義には地表の社会的創造物は、人間や社会が彼らの目的に応じて形成し利用する生産・生活の手段に他ならない。形成された諸施設の複合体が、環境となって社会を規制する側面があることは疑えないが、主体はあくまでも社会でなければならぬだろう。シュリユーター地理学は、決して単に「景觀」のみを発生的・機能的に把握するというのではなくて、景觀現象を、それを形成し利用している社会・個人と有機的に関連させて、両者を因果的・統一的に分析把握することに最大の課題を設定している。それは両者を単に機械的な対応関係に置いて見るという態度ではなくて、社会や個人を景觀現象の形成要因として積極的に捉え、分析対象たる後者と有機的に統一把握せしめようという方法態度なのである。「要因」と共に統一把握された「景觀」の分析を通して、究極の目標たる特定領域の個性を把握する。しかも、その「要因」を社会・経済・個人の内に積極的に求めて行く。このことはシュリユーター評価に際しては十分に考慮されるべき事柄に違いない。

## 一、青年シュリユーターの二論文

地理学者としてのシュリユーターの研究活動は、十九世紀と二〇世紀の交わり頃から、ほぼ死の直前まで、約五〇年間という長期間にわたっている。<sup>(1)</sup>半世紀にも及ぶ精力的な研究活動を内容的にみれば、それはほぼ二つの時期に分かたれる。すなわち前期(一八九五—一九一〇年)に当る約一五年間は、主として集落・一般地理学に関する方法論研究の時期として特徴づけることができる。この時期にかれの地理学、いわゆる景觀地理学の理論的基礎が形成された。かれの方法論的研究の成果は、一九〇六年の『人文地理学の目標』(以下『目標』と略称)一九一九年『地理学に於ける人文地理学の位置』(以下『位置』と略称)の二著作に結実している。<sup>(2)</sup>後者は時期的に前期をやや外れるけれども、内容的にはやはり前期における業績の集成という性格を持っている。後期は前期において確立された独創的な方法論を踏まえた実証研究の時期であり、この時期の所産は名著『先史時代に於ける中部ヨーロッパの居住領域』<sup>(3)</sup>

に集大成されている。これは相観的觀察法による歴史地理学的な地誌研究の代表的業績である。

ところで、上述のようにシュリユーター地理学の理論的基礎は、前期とそれに近い時期にほぼ確立されている。従来シュリユーター研究の多くは、訳書もあつてか前期の代表的な著作である『目標』と後期のはじめに公刊された『位置』に専ら依拠して行なわれてきた。いずれの著作も純方法的な思索の所産であり、そこには彼の地理学の理論的基礎が開陳されているであらうからである。本稿でも同様に方法論研究時代のシュリユーターに焦点をあわせて、その特質を検討するのであるが、これまでのシュリユーター研究とは少し趣を変えてみたい。つまり、シュリユーター地理学的方法論的特質の解明を、前記の純方法的な二著によるのではなくて、それより以前に公表された論文、すなわち集落の実証研究を主な素材に行つてみようというのである。従来のように著名な二著によらず、初期のモノグラフに依拠しようという方法を探るのは、言うまでもなくシュリユーター地理学の理論形成過程を具体的に追及するために他ならない。そうすることによって、かれの理論をより正確に理解しようと言うのである。

かれの研究生活を業績の内容からみれば、前記のように方法論追求に専念した前期と、実証研究に特色づけられる後期の二期に分けられる。しかし、方法論と実証という二つの研究は、かれのばあい前期と後期というように時期的に明確に分けられて行なわれたものではなかった。両期間を通じて、方法論と実証のいずれもが比重の置き方に差はあつても常に追求され、両者は有機的に結びつけられて、一方の研究成果が他方の研究に生かされるというような円環状の關係におかれていたのである。後期の諸研究は、たしかに前期に樹立された方法論を踏まえて行なわれた地誌研究に特徴づけられるといつても、この時期に於ても絶えず方法論の検討、具体化のための分析手法の工夫が試みられていた。また方法論研究として特色づけられている前期においても、この間、純方法的な研究に終始していたのではなかった。むしろ、かれは実証研究から入り、それを基礎にして方法論を着実に模索していったのである。

西ドイツ・ウェストフアリア生れのシュリユーターが、中部ドイツのハレ大学で、ドイツ語学や歴史学を修めたの

ち地理学に本格的に取り組みはじめてまもない一八九六年、かれはキルヒホッフ (E. Kirchhoff) 教授の指導の下で集落調査を試みた。調査のフィールドはハレの南方、北東チューリンゲンにあるウンストルート河谷に選定された。この調査は学位請求論文のために実施されたものである。<sup>(4)</sup> この時の調査研究はコイプラーによれば、極めて伝統的な集落地理学の方法・課題に依拠した実証研究であったという。<sup>(5)</sup> すなわち、ウンストルール河谷の集落変遷過程を、それを規定した諸条件（ことに交通位置を重視した）と関連させながら丹念に追及した研究であった。伝統的な学界の通念にしたがって行なわれたこの研究が、その後の彼の方法論研究に果たした重要な役割については後に詳述する。シュリューターはこの研究の完成前後に、いよいよ本格的に地理学を探究すべくベルリンに移り住むことになる。そこで彼は先の調査の経験を踏まえながら、人文地理学方法論の模索を一人続けて行くのである。

ベルリンでの十年近い方法論上の思索の成果は、一応一九〇六年『目標』に結晶しているのであるが、それに先立って彼はいつかの手堅い論文を公表している。その労作の一つは「集落地理学覚書き」(一八九九年<sup>(6)</sup>)。もう一つの注目すべき論文は「北東チューリンゲンの集落」(一九〇二年<sup>(7)</sup>)である。この二論文こそ、シュリューターの地理学方法論の形成過程の解明に利用しようとする論文である。いずれの論文を見ても、すでに彼は独自の方法論的基礎、いわゆる景観地理学の方法・課題を確立している―それは一八九六年から一八九九年の間と推定される―ことがわかる。その方法論の有効性を実証しようとした論文が、この二論文に他ならない。前者は考察対象としてドイツ大都市を、後者は北東チューリンゲンを、それぞれ取り上げている。論文公表の時期からみても内容をみても、これらの実証研究を通じてはじめて、『目標』にみるような彼独自の地理学方法論が形成されていったと考えると間違いなからう。この論文では方法論的見解は、未だ断片的な型でしか記述されていないけれども、それがかえって読む者の印象を深くする。なによりもこの二論文には生き生きとした考察例が豊富に盛られていて、かれの方法論の本意が汲み取りやすいという特長をもっている。本稿でシュリューター地理学の本質理解のために、あえてこの二論文を採用した

一つの根拠はここにある。

## 二、シュリユーター地理学の問題点

(A) 独立と統一 前述のように本稿では青年シュリユーターの二論文を主な素材にして、かれの地理学方法論の特質を理解し再検討することを中心課題にしているのであるが、その検討に入る前に、かれの地理学の問題点を必要なかぎり簡単に整理しておかねばなるまい。

シュリユーターおよび彼の地理学は、二〇世紀の初頭から今日まで、驚くほどさまざまな解釈を生んでいる。そのような種々な理解の上に展開された継承も批判も、当然に種々さまざまとならざるを得ない。このような事態をまねいた責任の一半は、かれの論理に不明瞭な箇所や理論的な矛盾が蔵されているためであろうことは確かである。シュリユーター地理学に孕まれているさまざまな矛盾・限界・問題点は今日までに数多く指摘されてきた。本項ではまず、これらの批判を必要限り整理し、問題点を浮き彫りする作業からはじめたい。

周知のように第二次大戦後、故飯塚浩二教授やマルクス主義地理学者から、シュリユーターおよび景観論に向けて厳しい批判が加えられてきた。かれらの批判は唯物論やマルクス主義的な認識論・科学論を踏まえての批判であるだけに、いわゆる伝統地理学の側から断片的に加えられる批判よりはるかに手堅く痛烈であった。従ってシュリユーター地理学の問題点を浮彫りするためには、かれらの批判を整理し検討することが極めて有効のように思われる。かれらの加えたさまざまな角度からのシュリユーター批判、それをいわば下敷きにして、その上にかれの地理学を乗せて再検討してみるとどうなるか。これが本稿の分析手法である。

シュリユーター地理学の方法論上の特質を、一般的な解釈に従って極く簡単にのべれば、ほぼ次のようになる。つまり、かれの地理学は「景観地理学」とか「文化景観の形態学」と通称されているように、人文地理学の研究対象

を、いわゆる「景観」——それは地表にその一部として存在している文化的創造物（複合体）の、感覚に反映された限りでの認識像であるが——に設定する。そうして感覚に知覚された地表の外観、「景観」によって個々の領域の個性把握を行ない（景観論的地誌研究）、更に、得られた「景観」を類型的に分類する（文化景観の形態学、かれの文化地理学）。これが彼の人文地理学ということができよう。かれは地表の現象複合体——これこそ本来の「地域」*Landschaft* というべきであろうが——を、その感覚に映ずる外観像によって捉えることを人文地理学の方法・課題としたのであるが、かれが考察対象を「景観」に限定した理由は、主に次の二つであると考えられる。その一つは人文地理学に個有で、しかも一般性をもった対象を与えるため。すなわち、かれによれば従来の人文地理学——ラツチェル(F. Ratzel)やヘットナー(A. Hettner)によって担われてきた——は、自然地理学の補助イースの位置にあり、その研究は専ら自然——人間の間の「関係」を扱っていたために、科学としての独自性はきわめて弱いものでしかなかった。そのような人文地理学に独立の科学としての独自性を与えるためには、なによりもまず個有の対象を設定する必要があるだろう。一般にどの独立の科学も、対象として個有の現象をもっているから、人文地理学の対象は「関係」ではなくて「現象」でなければならぬまい。かれはこのように考えていく。また専ら「関係」を分析する立場から出てくる当然の帰結として、観察の対象が自然と直接の関係ありと認められる人文現象に限定されることになる。これでは対象に独自性もなければ一般性もない。更に、コール(J. G. Kohl)の影響——ハレ大学時代のシュリユーターもその影響下にあったと推定される——を受けて展開していた人文地理学では、交通と密接な関係をもつ現象——たとえば交通集落——しか扱えない。研究の対象はもっと一般性を持たねばならない。個有性と一般性、そのいずれをも具備する対象が望まれるのである。だが、ここからは個有で一般的な人文地理学の対象——結論的に言えば文化景観現象ということになるのだが——は見出すことはできない。それには、この考えと合せ考えられる次のような第二の根拠があるのである。

人文地理学の独立を目指すにしても、自然地理学と決別して、二元的な方向においてではなくて、従来から保持さ

れてきた一元的統一を損なわない方向で遂行されねばならない、という強い要請が地理学界にはあった。単一の地理学という通念である。あれほど批判的な彼も、この通念を信じて疑わなかった。かれによれば、二つの地理学の一元的な統一を保持するためには、自然地理学―主として地形学―と（形態的に）類似の対象を、人文地理学は持たねばならない。これが人文地理学の対象規定に際して、かれが採った大前提であった。自然地理学は地形や植生といった、いわば自然景觀と呼べる自然現象を扱っているのだから、人文地理学もそれと類似の現象、文化景觀を対象にすればよい。文化景觀を対象にすることによって、人文地理学は個有で独自の、しかも一般性のある対象を得ることができるし、しかも自然地理学との統一は破壊されないで済む。人文地理学の自然地理学からの独立化と両地理学の一元化という相互に矛盾する方向が、文化景觀という対象の導入によって統一されているのが、何よりもシュリユーター地理学の顕著な特質となっている、そのために後に指摘するような多くの問題点を孕むことになった。かれが主張する「時間の克服」の導入なども、このことに密接な関係がある。

(B) 前提「単一の地理学」 故飯塚浩二教授やマルクス主義地理学者から放たれた批判の矢は、当然にこの点に収斂する。すなわち、シュリユーターが人文地理学の対象規定や位置付けに際して、単一の地理学を前提にし、両地理学の一元化を目指す方向、あるいは二元化を阻止するという意図の下に、方法論の探究をすすめて行ったという点に批判の鋒先が向う。これはシュリユーター地理学の出発点、理論的基礎に関する批判に他ならない。

まず、飯塚は人文地理学と自然地理学を「同一の基礎におくことができるかどうか、同一の指導的観点からみるとが可能かどうか」という疑問を提出し、シュリユーターの論の立て方を非難して次のように述べる。「それを現実そのものから読みとろうとする、という論法ではなくて、先験的に学問の特定の型が予定されているかのような倒立した論法」である。シュリユーターは、言葉の正確な意味で決して唯物論者ではなかったことは言うまでもない。むしろ、当時のドイツ・アカデミズムを支配していた新カント派の思想に影響されていたことはよく知られている。



かれは文化景観としてではあるが、文化的・社会的・経済的な現象そのものを積極的に人文地理学の対象に設定しながらも、それら諸現象と自然現象とを支配する運動法則の本質的な差異にまで認識が深まることはなかった。この点に彼の地理学の限界があり、継承する場合には十分に克服されるべき問題点があることは論を待たないだろう。ただ、かれのばあいには、方法論の樹立に先立って、いくつかの実証的な集落調査を試みており、その経験の厳しい反省を踏まえながら方法論を形成していった。この過程からみて、かれを全くの主観的な観念論者、あるいは素朴な形式論者と断定することはできない。強いて言えば、かれは近代実証主義者の一人であつたかもしれない。その彼がなぜ、地理学の統一や一元化を、侵すべからざる前提とせねばならなかったのであろうか。その背景や具体的な過程を吟味してみることは、単に学説史上の興味にとどまらないで、今日の我々にとっても十分意義ある作業ではなからうか。

(C) 方法としての「時間の克服」 上述のようにシュリューターは、一元論的な地理学を前提にして、人文地理学の対象・課題の設定を試みたのであるが、このような方法態度は人文地理学の観察方法として、いわゆる「時間の克服」の提唱となって現われることになった。かれによれば、人文地理学が究極的に求めるものは、時間的に変化してやまない人文事象の内で「不変のもの」、「繰り返し現われる傾向」であると言う。時間的モメントを捨象しようとするこの方法態度、方法としての「時間の克服」に関する問題性については、早く飯塚がフランス地理学派の採った歴史的方法と対比させながら徹底的な非難を加え、それを受けて奥田・森滝・松田<sup>(10)</sup>の各氏も同様の批判を繰り返し加えている。方法として「時間の克服」を導入するということは、人文事象に無時間性という烙印を押すこと、換言すれば歴史的な変化を否定することに他ならない。この方法では、したがってかれの地理学では、歴史的に変化する社会現象をとうてい把握することはできない。それはシュリューター方法論の根本的な欠陥の一つである、というのである。

一九世紀末のドイツ・アカデミズムに育ったかれに、唯物弁証法的な歴史観がなかったことは、むしろ当然のことには違いない。この点、ブラーシュといえども五十歩百歩といつてよからう。ところで、シュリューターは実証研究においては、集落・道路・土地利用など、いわゆる景観現象の時系列的な変遷を丹念に追跡している。たとえば、後に紹介するように北東チューリンゲンの景観論的地誌研究においては、この小河谷の居住史を古代から近代まで綿密な時代区分をしながら、その変遷過程を詳細に考察している。今日でもなお、かれは歴史地理学の一先達と見做されている。居住史や「景観」の時間的な変化を追求したシュリューターと「時間の克服」を主張する彼とは、いったいどのような論理で一人に結びつくのであろうか。「不変のもの」、「繰り返し現われる傾向」を究極の研究目標にしている過程、さらに、それが何を指していたのか。シュリューター地理学の理解のためには、この問題を具体例に則して検討してみる必要があるであろう。

(D) 「景観」の形態学 シュリューター地理学批判のもう一つの焦点は、かれの地理学が「景観」の地理学であるという点であろう。前述の通り、かれは人文地理学に個有の対象として、可視的な現象、景観現象を設定し、「景観」による地表の個性把握と景観分類を、人文地理学の方法・課題とした。かれに全面的に批判的な飯塚浩二氏は、やはりこの点にも非難を加えて、このような対象規定や課題設定は、「研究において機械的操作を可能に」せんがための規定であり、「立体的なものをしている一つの平面への投影においてのみ把握しようとするきらいなし」とし<sup>(1)</sup>、と非難した。また、川島哲郎氏も、地域的な現象は決して地上の物的充填物や経済景観のみにつくまるものではなくて、非可視的な現象をも把握しなければならない、と述べてシュリューターおよび景観論の限界性を指摘する<sup>(12)</sup>。さらに、同様の観点から奥田氏もシュリューターを批判して、かれの地理学は「空間的・地域的な現象形態のみを対象とし、一中略―単なる地域現象形態の感覚的で表面的な説明や自然科学的手法による解析をなしうるに止まっている」<sup>(13)</sup>と述べている。これにみるように、かれの地理学は現象の外的な形態のみを把握し、内容の考察を欠落させている、

という批判は少なくない。ある論者はシュリユーター流の景観論では、「地域の経済的な構造・機能を規定する生産関係のような最も本質的な要素が、不可視的であるという理由で研究の対象領域から排除されがちである」<sup>(14)</sup>（森滝・松田）と、やはりその限界性を指摘する。上野登氏もこの点に言及して、「存在と本質の対立を地理学的に統一せねばならないが、形態学（シュリユーター地理学もその一種―筆者）は存在の有的世界、素材的制限の学問にすぎない」<sup>(15)</sup>と述べるのである。かくて、かれの地理学は、景観現象論的地域形態学（奥田）と呼ばれ、内容を欠落させた単なる形態学にすぎないと評価されるのである。

シュリユーターに対する批判は、ラッチェルのエピソード（H・ハーンの規定）、ことにヘットナーによって早くから執拗に繰り返されたことである。批判の焦点も前に取り上げた諸点に関連している。すなわち、研究対象としての地理的な現象複合体（「地域」）は、決して景観現象、可視的な地的構成物のみによって構成されているのではないから、「景観」ではとうてい「地域」の全体像は把握できない、というのである。今日のドイツ地理学の主流をなしている地域生態学派の景観論批判を代表して、ニーフ（E. Neef）は次のように述べている。「外観的な現象の記述、つまり景観像の記述、それがもし内容の解明なくして行なわれるならば、換言すれば、その外観的な現象を究極において規定している内容を欠落させるならば、その記述は疑いもなく非科学的であり、地理学的な認識に対する致命的な回避となるに違いない」<sup>(16)</sup>。

だが、シュリユーター地理学は、かれ以後に展開した景観論は今しばらく不問にして、批判者の言うほどに単に感覚的に捉えられた景観現象の表面的・機械的な記述、内容の分析を欠いた景観現象形態学と規定して済むであろうか。かれの地理学は、そう簡単に極め付けられない面を持っているのではなからうか。かれは確かに「景観」を地域把握の最も重要なメルクマール、研究の対象と規定したけれども、それを単に感覚的・機械的に把握・記述するに止まっていたのであろうか。かれのモノグラフを検討してみると、どうもそうとは言いい切れないように思われる。かれ

の地理学には形態論を超える方法・課題が含まれているように考えられるのである。

シュリユーターの「景観」研究の方法で最も注目すべき点は、景観現象の分析に際して、その外観的な形相を単に感覚に映るままに記述するのではなくて、その現象の形成要因にまで考察を加えて、景観現象と形成要因とを常に有機的に関連させながら、統一的に把握するという方法である。後に紹介する「景観」の因果的説明、これである。たとえば、後に検討する二論文において、集落パターンや道路網・農場などが、法律・議会、国王・政治家・資本家等の個人の意思によって規制されたり、経済的・社会的な諸条件と密接な関連の下に形成されていく過程やそのメカニズムを積極的に分析している。また、大都市内の地帯分化や諸施設の空間配置の分析に際しても、すぐれて立地論的な考察を加えている。詳細は後に紹介するけれども、このような考察例からみて、かれの地理学を単なる景観現象形態論として封じ込めることは、いささか早計ではなからうか。たとえ、そのように規定するにしても、もう少し彼の地理学の本質を理解した上で行なわれなければならないまい。

以上、きわめて不十分ながらも、既存のシュリユーター批判のポイントを整理し、若干の疑問や新しい検討課題を挙げてみた。次項以下では、これらの諸批判を導きの糸として、シュリユーター地理学の本質に再検討を加えてみよう。

### 三、「景観」の因果的説明

(A) 出発・リヒトホーヘン・ラツチュエル批判 シュリユーターはハレ大学時代、キルヒホッフ教授の指導の下に学位請求論文の作製を目指して、北東チューリンゲン・ウンストルート河谷の集落調査を実施したことは既に紹介した。この時の論文はそのままの型では読むことができないが、その内容は六年後に補足改編されて「北東チューリンゲンの集落」と題して公表されている。この一九〇二年の論文には序論部分があり（新しく挿入されたと推定され

る)、そこではかれの独自の方法論―景観論―が明確に展開されている。しかし、ウンストルト河谷を實際にフィールド調査した当時のかれには、未だ確固とした独自の方法も課題も持ち合わせていなかったことはコイブラーの指摘にある通りであろう。地理学を本格的に専攻しはじめて二、三年にしかならないのだから。したがってその時の研究は、一般の地理学徒と同様に極めて伝統的な方法に立脚して遂行されたのであり、具体的には一河谷の居住史を、専ら交通上の位置条件と結びつけながら考察していたのである。そこには明らかにコールの影響が認められるのであるが、かれは後にその方法・課題を不十分なものとして拒否している。

地理学を志す若い学徒がフィールド調査から出発し、その際に既存の方法・課題の枠内で研究を試みようとする態度は、今日も同様であろう。だが、シュリューターはこの調査の過程で、疑問とも信念ともつかない一つの考えに達していた。「人文地理学の分野では、リヒトホーヘン(F. v. Richthofen)の定義にしたがっては、実際の研究は可能ではないだろうか。」すなわち、人文地理学が対象とする人文現象を定義のように自然―人間の依存関係という視点からのみ研究したり、その研究対象を自然と関係ある人文現象にのみ限っていは、人文地理学の豊かな研究領域は拓けないし、ましてや現象の十分な把握は不可能ではないか。自然と直接的・間接的な関係をもつ人文現象には限りがないが、さりとて自然から十分説明できる現象もないのだから。人文地理学には従来とは異なった視点からの対象規定、分析方法が必要なのではないか。伝統地理学に投げかけられたこの疑問は、そのままかれの地理学探求の出发点になる。

かれはこの疑念を、当のリヒトホーヘンの影響下にあったベルリン留学中にも温めつづけて、師とは相異なる地平で人文地理学の方法論を、一人模索していく。言うまでもなく当時の地理学界は自然地理学万能の時代であり、その本拠はベルリン大学であった。このような環境の中で彼が地理学方法論を探究していったという事情は、かれの方法論を検討するにあいには十分考慮しておかねばなるまい。かれが人文地理学の独自性を主張する一方で、自然地理学

との統一を、侵すべからざる大前提として常に念頭においていたのは、このような事情と決して無縁ではなからうからである。他方、人文地理学の分野ではラッachel流の関係科学的な方法論が一般化していた。この派の理論はシュリユーターにとっては、常に反面教師的な役割を果たしたことは後にみる通りである。

(B) 「関係」と「現象」 地理学を本格的に修めるためベルリンに移住してから、シュリユーターは上記のような学問的雰囲気の中で方法論の探究に専心するのだが、留学三年目にして早くも一応の成果に到達している。その成果の概要は、一八九九年「集落地理学覚書<sup>(18)</sup>き」(以後「覚書き」と略称)に、未だ断片的ながら明確に読みとることができる。それは後に景観論、相観的観察法と呼ばれる方法・課題である。この意味でこの論文はかれにとってきわめて重要な意義をもっている。したがってこの論文はシュリユーター理解にとって決して見落とせない重要論文の一つであると言いうことができる。

かれは「覚書き」のなかで、当時一般化していたラッachel流の関係科学的な人文地理学の方法・課題をはっきりと拒否する。まず、対象規定に関して、「もし人文地理学は人間の自然への依存性、あるいは自然の人間への作用の態様を考察対象にする、と考えるならば、それは明らかに間違っている」と断言する。この発言は当時の学界状況を考えるならば、随分と勇氣のいる一大冒険であつたに違いない。だが、かれはこのように明言して、リヒトホーヘン・ラッachel流の地理学の関門を通過して新しい領域に歩を進めていったのである。「自然の人間への作用、人間の自然への依存関係を究明しようと企図するならば、換言すれば、研究目標を《現象》それ自身でなく《関係》の仕方とするならば、それは地理学の統一を破壊するだろう。」なぜなら、かれによれば自然地理学は個有の《現象》―地理的自然―を研究対象にしているのに、従来の人文地理学は、専ら《関係》の究明に終始していたからである。これでは両地理学の対等の統一は不可能である。統一のためには、人文地理学も個有の《現象》を対象にせねばなるまい。リヒトホーヘンは、この鬼子ともいふべき弟子の言動を温く見守った、とラウテンザッハは感嘆している。

かれは従来の人文地理学が、自然との「関係」を基準にして対象規定を行なおうとする態度、言いかえれば土地自然との条件的、制約的な「関係」をもつ人文現象を専ら考察対象とする方法態度に対して、具体例をあげて反論していく。たとえば、集落を考えてみると、その立地は多分に土地自然から規定されるにしても、集落内部の構造―建物の様式、その空間配置・道路網等―は決して土地自然に制約されたものではない。「個々の市民はかれ（の所得や身分）に相応し、かれの目的に合致する場所に自分の家を建てる。君主の意思や都市議会の決定は、都市の総ての部分を予め決められたプランにそって建設させるし、高い地価は建築規則によって制限されないかぎり、建物の高さを増加させる。」個人や君主の意思、都市議会の決定、高い地価などの個人的・社会的・経済的な条件が都市内部の構造を形成する要因になっているのであって、土地自然が要因なのではない、と言うのである。自然的制約という対象規定の基準にするならば、多くのばあい集落の発展や内部構造は対象から排除されかねないであろう。しかし、それらは地表を構成する現象であるから、すぐれて人文地理学の考察対象ではないか。かれはこのように述べて、従来の人文地理学の対象規定が、自然との「関係」を基準にしたために、対象領域に不当な限界を付与してしまっている、と非難する。対象の選定は「『関係』を基準にして決められるべきではない」という、今日からみればはなはだ問題を孕んだ見解は、関係科学的な対象規定への批判から導き出された見解である。

またコール流の集落地理学は、集落を専ら交通条件や位置の観点から捉えようとするので、交通集落や都市は扱えても村落等を含めた集落一般を対象にできないという欠陥をもっている。考察対象に、もっと一般性を持たせるような観点や基準が望まれるのである。

(C) 現象の類似性 関係科学的な基準による対象規定を不十分なものとして拒否したシュリューターは、個有性と一般性を具備した、明確な基準から規定される対象を探索して行かねばならない。人文地理学の対象は、まずどのような基準に立脚して選定されるべきであろうか。

かれはこの課題に答えるために、独自の科学論を前提に持ち出している。すなわち、かれによれば、一般的には個々の科学の分類は、その科学が現在対象としている現象の「要因」の類似性を基準にするのではなくて、現象そのものの類似性に基いてなされるべきだというのである。現象そのものの類似性とは、かれのばあい非要因、すなわち現象形態上の類似性ということに他ならない。ここにも彼の地理学が形態学と呼ばれる要素が孕まれており、この命題そのものは決して容認できないけれども、それはともかく、かれはこの命題に立脚して人文地理学の対象を確定しようとする。

伝統的な人文地理学の対象を一応御破算にした現在、その対象は目下未定である。先の命題を前提にするかぎり、対象規定の仕方は一つしかない。すなわち、人文地理学をどのような科学に分類するかが決められねばならない。しかし、それは不可知の事柄に達しない。なぜなら人文地理学の科学上の位置付けを行なうには、かれによれば、それが扱う対象の形態上の特質が知られていなければならないからである。しかし、シュリューターにはこの問題の解決は容易である。かれには、人文地理学は自然地理学とともに「土地の一部をなす現象の形態と配置」に関する科学——地理的科学——であるという前提があるからである。人文地理学は自然地理学と同一部門に分類される科学である以上、その対象規定は容易である。すなわち、人文地理学は自然地理学が対象とする現象に形態的に類似する現象を対象にすればよいからである。

ところで、かれによれば「地理学（ここでは自然地理学として読んで頂きたい——筆者）が得んと努めるものは、土地の一部を構成する現象の形態と配置についての知識であるが、それもその現象が空間觀念 *Raumvorstellung* の感覚によって、つまり視覚や触覚によって知覚されるかぎりに於てである。」つまり、かれの考えでは、地理学は土地を構成する現象を、例えば地形や植生のように、知覚された「形態特徴」 *Formcharakter* を基礎にして把握する科学である。とすれば地理学の一分科である人文地理学も、やはり土地を構成する現象——社会現象——を、その形態特徴



によって把握する科学ということになる。土地を構成する人文事象の知覚された形態特徴、これこそ後に文化景観と呼ばれるものに他ならない。

(D) 景観現象と非景観現象 科学的な認識を広義に解すれば、客観的に実在する実体の感覚的な知覚を意味するけれども、シュリューターのばあい、それは極めて狭義に解されている。つまり、感覚的な知覚とは、一定の地理学的な素養と問題意識をそなえた観察者の肉眼に映ずる、ということである。したがってその実体は、かなりの規模と数をもった物的な事物、具体的には集落・道路・工場・耕地・森林等の文化的、社会的、経済的な創造物ということになる。「景観」は、そのような意味で感覚的に知覚された形態特徴のことに他ならないが、ではかれの地理学では非景観的現象は総て考察領域から排除されるのであろうか。かれによれば、「神話、習慣、病気、歴史的事件、芸術、哲学的・宗教的世界観などは、いずれも間接的に土地への関係を持っているのであるから、その分布や要因については地理学的な観察も不可能ではない。」だが、それらの現象は明確な形態特徴となつて地表に現われないかぎり人文地理学の対象には相応しくなく、その研究は禁欲されざるを得ない。地表に現われるとは、かれのばあい、「景観」として把握されるような現象、すなわち地的創造物として現われるということに他ならない。

かれは確かに人文地理学の対象を、文化的・社会的・経済的な地的構成物、その外観的な形態特徴に限定した。このことから直ちにかれの地理学を平板な景観現象形態学と規定してよいか。ことはさほど簡単ではない。かれの言うところをもう少し聞いてみよう。シュリューターの考えでは、政治・宗教・イデオロギー・歴史的事件などの人文事象は、それが地表上に物的充填物として結晶するかぎり考察の対象領域に入ってくる。いやむしろ、それらは積極的に考察されねばならないと考えている。つまり、そのような人文事象は、地表の物的充填物、その形態特徴の形成要因として、因果の関係において統一的に把握されるのである。景観現象、文化的な地的創造物自身の内には、その立地や形態を規定する要因は存在しないからである。それ自身は不可視的な現象であるが、景観現象として結晶する現

象は、景觀現象の内的な形成要因として積極的に考察される。シュリューターの景觀論は、このような独自の論理構造を持っている。それは「景觀」の単なる感覚的、機械的な分析・記述ではなくて、「景觀」の因果的解明を目指すものと言いうことができる。

(E) 「景觀」の類型化 前項でみたような対象の一般的な規定は、かれの専攻分野である集落地理学に適用すればどうなるか。集落地理学の対象・方法のより具体的な確立が望まれるのである。「都市と村落は地域 *Landschaft* の部分であって、いずれも地表の他の諸断片と結合して一つの特徴を現出させる。ところで（自然地理学の分野で行なわれる）海岸の研究のばあいには、海岸の全体的な形態特徴を基礎にして海岸の特徴把握がなされるが、集落地理学の研究にとって、それと同じ役割を果すのは人間的居住の感覚的に知覚された像である。集落地理学は人間居住の知覚された形態特徴を分析し、それを体系的に分類することを中心課題にする。」ここにかれの地理学、いわゆる景觀地理学の対象・方法・課題が適確に表現されている。村落や都市は地表の一部を構成するのであるから考察対象にする、という視点に立てば、集落一般が考察領域に入ってくる。自然との関係や交通との関連という基準による対象の限定が排除されたのである。

ところでシュリューターは先に引用した断章のなかで、<sup>19)</sup>「地域、*Landschaft* と形態特徴、あるいは感覚的に知覚された像—これこそ「景觀」であるが—という二種類の語を明瞭に使い分けている。ドイツ語の *Landschaft* は、我国ではしばしば「景觀」と訳されることがあるが、かれの場合それらはどのような内容と構造連関を持たせて用いられているのであろうか。地理学の中心概念とされる「地域」とは、本来、地表を構成する、又は地上に展開するもろの現象の相互作用的な複合体を实体とする概念である。現象複合体は、<sup>19)</sup>それぞれの科学の対象であって、それは既知部分と未知部分を含んでおり、科学的営為は既知部分を漸進的に増加させる。地理学的な「地域」とは、このような実在する現象複合体の地理学的側面に他ならないだろう。したがって「地域」概念の内容には、シュリューター的な

意味での可視的現象も不可視的な現象も、ともに包摂されていることは疑の余地はない。だが、かれの「地域」は本来の「地域」とは少し狭義に用いられている。本来、地理学は土地の科学であると言われてきたが、シュリユーターも同様に考えていたと言えよう。土地とは自然的土地とその上に造営された社会的創造物である。地上で展開される現象であっても、この意味で土地を構成しない現象は地理学の考察対象には相応わしくない。こういう信念がシュリユーターにはあったと言ってよからう。地理学は土地をその外観的な形態特徴、「景観」によって把握する。人文地理学は文化的な地的構成物、その複合体を把握する。かれの「地域」とは自然的・文化的な地的構成物の複合体であった。

かれはこの地的複合体、客観的な実在としての「地域」を、その外観的形相、いわゆる「景観」によって把握しようと考えた。それは「地域」の「地域」像に他なるまい。だが、シュリユーターの「地域」にしても、それは「景観」につくるものではない。換言すれば、「景観」としては「地域」は決して十分把握されない。「地域」は「景観」として以外に、いなそれ以上に「機能」としても「価値」としても把握されるからである。地理学史の展開を見ても認識の深化は、前者から後者に向って進んできた。(W・クリスタラーの研究を思い出して頂きたい。)シュリユーター地理学の限界はこの点にこそあったと見なければなるまい。

シュリユーター地理学は、土地自然を舞台とする人間活動が作り出した地表(いわゆる文化「地域」)の「形態特徴を分析し、その類型的な分類を行なう」ことを目指している。つまりかれは「景観」によって、ある領域の個性を捉える、いわゆる景観論的地誌学にとどまらないで、文化景観の類型化をも目指すのである。たとえば、集落地理学のばあい、集落の形態上の類似性に基いて集落を体系的に類型化する科学、それを彼は集落学 *Siedlungskunde* と呼んで、これは集落地理学の前提であると言う。そして両科学の関係は、「ちようど植物地理学が植物学を、また動物地理学が動物学を前提にするのと同じである」という。しかし、かれによれば、この集落学は、植物学や動物学と違

って、他のいずれの科学も追求していないので、集落地理学者自らが造り上げねばならない。この科学こそ彼の文化景觀の形態学、かれの文化地理学に他ならない。

かれの地理学の体系は、ある特定領域の“地域”構造を「景觀」によって捉える景觀論的地誌学と、「景觀」そのものを分類する景觀形態学の二つから成っており、両者は有機的・循環的な関係におかれている。すなわち、個々の具体的領域の特殊な景觀分析から出発し、得られた景觀群の類型的な分類を行なう。そして今度は、この一般的類型を基礎にして個々の領域の景觀特徴を捉える。特殊から一般類型へ、一般から特殊へ、こういう構造連関をもっている。なお、この構想は、かれ自身によっては十分追求されることはなかった。それは文化景觀の類型化の作業が十分だったからである。管見によれば、かれのばあいこの種の研究は地形学の成果をアレンジして試みられた海岸地形の分類作業があるにすぎない。<sup>(26)</sup>

(F) 「景觀」と「要因」 前項で検討したようにシュリユーターは、個々の特殊な領域の“地域”構造の特性を、その形態特徴、「景觀」によって把握し、さらにその類型化を人文地理学の中心課題としたのであるが、そのばあいかれは、「景觀」をどのような方法態度で扱おうというのであろうか。単に感覺的、機械的な把握・描写で済まそうというのではなからう。

かれは感覺的に捉えられる景觀現象を、あらゆる「要因」と結びつけて、因果的に解明しようとする。「従来の地理学で行なわれてきた都市や村落の外觀の記述は、未だスケッチの域をさほど出ていないものであった。集落相觀の科学的な分析は、これまで欠落していたのである。」かれは「景觀」の科学的分析の方法を探究する。そして彼の採った方法は、外觀の科学的分析に際して、景觀現象をその内的要因と関連させて、因果関係において把握するという方法であった。「景觀」の因果的解明 (ursächliche Erklärung) である。そして、「この課題を達成するためには、(景觀の) 解明に際して完全に自由な手法が採られねばならない。つまり、人文地理学はあらゆる種類の要因群——土地自

然にあるものも人間の精神に内在するものも——を総て考慮せねばならない。」景觀現象の多元的で因果的な解明の提唱である。

(G) 「景觀」の立地論的考察 前項までに言及したようにシュリユーターは、一八九九年の時点で早くも景觀地理学の理論的基礎を確立している。それは論文「覚書き」に断片的ながらも明確に読みとることができる。しかし、この論文は方法論の単なる開述に終わっているのではない。この論文は、すでに確立された方法論の有効性を検証することを目的にして書かれた、すぐれて実証的な研究である。方法論と実証を絶えずかれ一人の研究の内で結合させていく態度は、かれの長い研究生活で一貫した基本態度であった。検証のための対象としてドイツ大都市が選ばれ、資料は既存の諸研究から専ら得られている。とはいえ、そこには彼独自の見解や方法論の生き生きとした適用例が数多く盛り込まれていて、かれの地理学を理解するのに貴重な示唆を与えてくれる。本項ではこのモノグラフから興味深い考察例や見解を拾って紹介してみよう。

かれはドイツ大都市の「地域」構造を分析するために、まずそれを平面形態と立面形態に分けて考察していく。たとえば、大都市の平面形態の考察では、建物で被覆された都市域の内部には、景觀的な特徴からみて四つの異なった圏が一般に形成されているという。すなわち、(一)、本来の都心部、(二)、都市的な影響をうけた居住地帯、(三)、工業地帯、(四)商店・交通施設、精神労働や国家行政機関の諸施設が立地する圏。これらの同心円状の各圏は、都市ごとに種々のヴァリエーションをもつけれども、どの都市にも認められる。かれはこのバージェス理論にも見るような同心円状の各都市圏の構造を、その形態特徴によって分析・記述している。だが、かれの都市研究は、単に各圏の形態特徴の記述にとどまらない。都市の平面形態や各圏の形成メカニズムにまでも分析のメスを加えるのである。

たとえば、都市域の内部に同心円状の圏構造や特徴的な領域——景觀的に同質の領域——の分化が生じる理由の一つとして、都市内に立地する各種の建物や施設が、各々それに相応した特定の空間配置をとって立地するというメカニズ

ムのあることを指摘する。かれによれば、「大都市内のいろいろの種類の建物の空間配置をみると、あるグループの建物群は、市域全体にできるだけ均等に分布しようとして立地しているが、他のグループの建物群は、前のグループと違って一箇所に集中するように立地している。」前者に属する建物は、毎日の生活に必要な諸施設（たとえば小商店・低次の教育施設・教会等）の建物であり、後のグループの建物は、政治機関、芸術・文学・科学関係の諸施設、大商店・工場・交通施設（ターミナル・事務所等）である。建物の種類によってその空間配置のパターンが異なるのは、「建物の立地を決める作用要因が存在する」からである。かれによれば、いろいろの種類の建物は、それぞれが果たねばならない「目的」に応じて空間配置する必要性をもっている。換言すれば、各種の建物は、それが果さねばならない「目的」（機能―筆者）に相応しい個有の立地様式―たとえば均等か集中か、都市域のどこか特定の場所に―をとって立地する。個有の目的と立地様式をもった個々の建物の空間立地、その実態を結果としてみれば、先にみたような圏構造、地帯分化が現われるのである。これはすぐれて立地論的な考察法と言ってもよからう。なおこの例では、建物を単に形態特徴から捉えるに止まらず、建物の種類、その機能にまで分析を進めていることは注目してよい。

これに類する他の考察例を紹介しておこう。西ヨーロッパ大都市の平面形態をみると、建物で被覆された都市域が西方に向って拡大している事実がしばしば観察される。なぜ、このような現象が生じるのか。かれはこの疑問に答えて、西方への都市域の拡大は、この地方に吹く偏西風と密接に関係していると判断する。偏西風は言うまでもなく自然現象である。かれはこの場合には自然に「要因」を求めるのではあるが、しかしその分析態度は、自然環境決定論者のそれではない。「自然的条件は単に間接的にしか作用せず、それを利用する人間を前提にしなければならぬ」というのが彼の基本態度である。かれの説明を少し聞いてみよう。多くの大都市に見られる、居住地の西方への一方向的な拡張、その現象を詳細に観察してみると、拡大された居住地区の住民は、一般に裕福な階層の人びとから

成っていることがわかる。経済的に裕福な市民層は、より良い居住環境を求めて移住することが出来る。ところで、偏西風のために、都市の工場や住宅から排出される煙塵は東に流れがちなので、居住環境は都市域の西に行くほど良くなる。そこで、煙塵を避けて風上の西方に、裕福な住民は居住地を選択しようとする。このような居住地選択の結果として、都市域の西方への拡張現象が生じると言うのである。かれはこのようにして、説明すべき都市の西方への拡大現象を、その住民の階層性や動機を媒介させて、自然現象たる偏西風と結びつけて因果的に説明している。

「景観」の因果的説明とは、この例にみるように極めて立地論的な考察法を用いてなされるのである。

(H) 自由意思と法則 シュリューターは、かれの中心課題たる景観現象の科学的な分析、かれのいうところの因果的説明に際しては、自然とか交通といった特定の条件に要因を求めるのではなくて、「完全に自由な手法」が採られねばならない、と主張した。「自由な手法」とは、要因を求める方向を限定せず、多元的に要因を探究することに他ならない。しかし、注目すべきことは、この場合にかれの採った態度は、自然に形成要因を求めるという姿勢ではなくて、それを社会的・経済的・個人的な現象の中に探求しようという態度であったことであろう。自然との因果関係を考える―それをかれは決して拒否したのではないが―にしても、「それを利用する人間を前提にしなければならぬ」とのである。かれは別の論文で、歴史上のさまざまな民族の文化発展は、かれらの生活舞台たる自然環境からは、とうてい十分に説明つかないと述べている。この点からみても、シュリューターは、その理論に重大な欠陥を含みながらも、社会科学への道を一步も二歩も進んでいたと言っても過言ではなからう。

考察対象たる景観現象の形成要因は、なによりも社会、経済、個人的意思の内に求めねばならないというかれの法態度、それはこの論文の随所に現われている。たとえば、かれはヨーロッパ大都市の形態特徴の形成要因として、民族性・経済的変動・政治的状况・歴史的事件、さらには卓越した才能を持った個人の意思などを挙げて、それらと景観現象との関連を追究している。その二、三の例を上げれば、たとえば都市の形態特徴と景気変動との関連に言及

して、「好況は、大規模で比較的均質な都市拡大をもたらすが、停滞や不況は目立った特徴を形成しない。ある都市の発展テンポが急激かゆるやかかは、その都市の経済的状况によって左右されるがそれは都市の平面形態に顕著な差異を生じさせる。」あるいは次のような考察例もある。「君主や領主の命令、特定の政治体制や都市議会の決定などは、都市内の交通プランや農村の農場形態を細部にわたるまで決定することがある。また、建物の高さを一警察令が規制することもあるし、それぞれの時代の支配的な思考方法も都市の形態に反映されることもある。」かれの形成要因の追跡は、さらに多元的となつて、ついには天才的な個人の創造的な意思にまで及ぶ。「ある領域の特別な条件と個人の天才が合体して、新しい時代が發展する。たとえば、大企業主クルップ (A. Krupp) は、かれの工場や労働者住宅街を大規模に建設してエッセンの都市發展に間接的な影響を与え、その結果この都市の外観を急激に変貌させた。また大政治家ビスマルク (F. Bismarck) は、ベルリンの都市發展、したがってその形態変化に強い影響を及ぼした。」君主や領主、大ブルジョアジーや偉大な政治家、かれらが景觀形成の上で果す役割を、シュリユーターは人間の自由な意思と呼んで、重要な要因と見做した。かれはこの他にも古今の諸都市を取り上げては、さまざまな要因群と結びつけながら、その特徴を説明している。驚くべき広範な要因群の涉猟である。それは関係科学的な手法を捨て、「自由な手法」を採用した当然の帰結に違いない。

以上の紹介から容易に理解できるように、シュリユーターは研究対象たる物的な「地域」構造、その認識像としての「景觀」の形成過程に働くさまざまな要因を、一つ一つ涉猟して行くのであるが、要因を辿っていき着くところ、すなわち要因の根源として、かれは人間の自由な意思を想定している。「人間の意思 (menschliche Wille) は一つの力であつて、その意思の力は自然力と協働して、生き生きと(地表の)外被に作用する。」君主・領主・大資本家・大政治家などが、偉大な個人として登上してくるのは、この考えに基く。この方法態度は社会科学の正しい方法とは決して認めることは出来ないだろうが、しかし、かれは人間の意思決定を、そのまま承認してしまうことはなかった。かれ



は次のように述べているのである。「個人の行動や意思決定といえども、特定の法則に支配されているであろうことは疑う余地はない。人間の意思を支配する法則に関する知識が是非とも必要なのである。」ここで彼が法則といっているのは、後に展開された形態変化の規則性といった種類の法則ではなくて、社会を貫いて個人をも支配する、自然法則のごとき法則、社会経済法則ではなかったかと思われる。かれはこの法則を、自然法則と対置せしめて用いているからである。だが、かれ自身はこのような法則を積極的に追究することはなかったようである。なお蛇足ながら言い添えれば、文化地域の空間秩序、社会経済現象の空間構造に関する法則の認識が登上するのは、ドイツ地理学に限って言えば、ようやく一九三〇年代に入ることであるとされる。すなわち、ヴァイベル (L. Waibel) がチューネンの農業立地論、農業地域モデルを、農業地理学にとって有効な理論だとして再評価したのは一九三三年。またクリスタラー (W. Christaller) は同年に、商業・サービス業の立地論を基礎にした都市 (中心地) 配置論を公にしている。これを画期にしてドイツ人文地理学は、シュリユーターを超えて新しい時代に移った、とハーンは述べている。<sup>(21)</sup>それは単に景観論から機能論への移行にとどまらず、個性記述的科学から法則定立的科学への前進でもあった。

#### 四、方法としての「時間の克服」

(A) 歴史的形成物としての集落 前章で述べたように、シュリユーターは一八九九年「覚書き」において、かれの方法論の骨子を展開し、引きつづきドイツ大都市を事例にして方法論の有効性を実証してみせた。その後、方法論をさらに精緻化し、今度は北東チューリンゲンを検証の場を選択して理論を展開した。それが一九〇二年「北東チューリンゲンの集落―集落地理学の問題の取扱に関する一事例―」(以下「北東チューリンゲン」と略称)である。この論文は一八九九年「覚書き」と同様に、序論にあたる方法論部分と、その検証部分であるフィールド研究との二つから構成されている。この内で後の実態調査の部分は、約六年ほど前に試みられたウンストルト河谷の集落調査を

主な素材にして書き改められたものである。一八九六年当時には、かれに独自の方法論は未だ樹立されていなかったのであるから、序論の部分は学位論文に新に追加されたのである。要するに論文「北東チューリングン」は、学位論文「ウンストルト河谷の集落研究」を実証部分にし、論文「覚書き」に展開された方法論を序論にして、これまでのシュリユーターの研究を集めた論文ということが出来る。ちなみに、これは教授資格請求論文といわれる。すでに前章でシュリユーター地理学的方法論的基礎たる景観論に論及したので、本章では彼の注目すべき方法命題、方法としての「時間の克服」について検討したい。

かれは小領域・北東チューリングンの集落研究に当り、まず統計的資料を検討して、この地方の現在の一村落当りの人口規模や集落形態が、この領域の東半分と西半分で対照的な差異を持っていることに注目する。すなわち、東半分の諸集落は、概して一村落当りの人口規模が小さく、その居住地もコンパクトに凝集している。それに対して西半分では、村落の人口規模が一般に大きくて居住地もまた広く拡張している。かれは、このような明瞭な対照的差異を生じさせた原因を、この小領域を過去に住み分けた民族の特性―スラブ民族とゲルマン民族の民族性―に基因させている。つまり、現在の集落パターンの特徴を、居住開始期の民族特性と関連させて理解しようというのである。集落研究に関して、かれは次のような注目すべき見解を持っている。「集落の地理学的な観察においては、歴史的事象をも合せ考えること。ある領域内の集落は、あらゆる部分に到るまで歴史的な形成物であり、まさしく集落は歴史的な経過の沈澱物に他ならない。それゆえ我々は、人口等の統計的な分析の後には、集落の歴史的形成の考察に移っていかねばならない。」この考えに立脚して、かれは北東チューリングンの居住史、集落変遷過程の具体的な分析に入り、この地方の居住史を古代から現在まで五期に区分して詳述している。ただし「集落は歴史的な形成物であり、絶えず変化・変遷する概念である」からである。

また、かれはこの論文において、集落研究に関する重要な研究課題を提起している。それは過去の時代の集落、

「地域」、生活空間の復原研究である。つまり、「過去の歴史時代において、土地はいかなる状態にあったか」を究明する課題である。かれは殊に最古の民族の居住直前の「地域」状況、換言すればかれらが居住に際して生活空間にした土地の性状の復原研究を重視する。これこそ原「地域」の景観復原研究であるが、この課題は彼の生涯の研究課題となった。

(B) 「不変」と「繰り返し」 ところで、第二章(C)で言及したように、かれは人文地理学の方法として「時間の克服」を主張している。「時間の克服」の導入は、論文「北東チューリング」においても、後にみるような形で表明されているが、その積極的な主張は「人文地理学の目標」に於てである。すなわち、かれによれば、「地理学の考察方法はその理念に従えば無時間である。もしも現象が不変を示さないものであれば、その不変を求むべきであり」、「変化の中に恒常を求めて時間的モメントの克服に努めなければならない」<sup>(23)</sup>。この方法態度は、前項でみたように集落を歴史的な形成物、変化する概念であると認識して、居住史を丹念に追跡していったシュリューターを知る者にとっては、すこぶる理解に苦しむ態度といわねばなるまい。この二つの方法・課題は、かれの地理学に於て、いかに結合されるのであろうか。

時間的モメントを捨象して現象の観察に当るといふ基本態度は、この論文にも既に現われている。かれは、「集落の研究のばあい、研究の目標を变化のなかで継続するもの、常に繰り返し現われる傾向に置く」べきだと主張する。「時間の克服」とは、観察において「变化のなかで不変のもの」、「絶えず繰り返し現われる傾向」を追求する方法態度に他ならない。かれはこの方法を単に言葉の上で主張するにとどまらず、すでにこの論文に於ても、その態度から個々の現象を考察しようとしている。次に考察例を二、三挙げてみよう。無時間性を主張するかれの本意が、少しは理解できるかもしれない。

(一)、北東チューリングンの集落をみると、この小領域の東西で明瞭な対照的差異が認められる。すでに紹介した通

り、この差異の原因を、かれは居住開始期に住み分けて入植した二つの民族の習慣や民族性に求めた。かれの考えでは、村落の形成期に付与された居住様式というものは、それ以後、種々の情況のなかでさまざまな変化を受けるにもかかわらず、その基本特徴は不変のまま継承されるのである。いわゆる「慣性」という概念がかれにもあるが、ここにはマイチェン (A. Meitzen) の思想的影響をみることができよう。かれが「変化のなかの不変」という時には、慣性的現象が念頭にあったと推察される。これを捉えるのが、なによりも人文地理学の研究目標だと言うのである。

(二)、時間的に変化する現象のなかで「絶えず繰り返される傾向」を捉えた考察例もいくつか見出せる。たとえば、集落の立地選択に際して、時と所を問わず、人間が自分の居住地を選ぶ時に繰り返される二つの行為傾向があると言う。その一つは、流水にできるだけ近接しようという行動、他は平坦地においては確固とした果状の凹地、谷壁の凹地や割れ目のような場所に集落を定めようとする行動。このように普遍的に選定される場所を、かれは *Nestlage* と呼んでいる。この *Nestlage* を選定しようとする行為傾向は、かれのいう「絶り返される傾向」の一つである。

(三)、北東チューーングンの全史を通じて、絶えず繰り返される傾向 (現象) として、小領域の東半分と西半分にみられる対照的な差異がある。この対照的な差異は、この地方の全史を通じて、いろいろと現象面を変えながらも消えることなく絶えず繰り返して出現する。また、この小領域は歴史の曙の時代から今日まで、常に東西および南北方向の民族・文化・財貨の通過地方 *Durchgangsland* でありつづけ、ために極めて非自律的な一地方に終始してきた。古くはゲルマンとスラブの両民族を結ぶ東西方向の民族的・文化的な交流の通過域であったし、新しくは中・北ドイツの交通の通過域になった。このような非自律的な「通過地方」という、この地方がもっている不変の特質が、この諸現象の特性や変化を常に左右して来たのである。逆にいえば、この地方のいろいろな現象の特性、その変化は、この通過地方という不変の性格と結びついているのである。

シュリューターが人文地理学の研究目標とした「変化のなかで継続するもの」、「絶えず繰り返される傾向」とは、

当該論文でみる限り、上記の例にみたような現象・傾向であった。

(c) 一般化と地理学の統一 では、なぜ、どのような意図で、かれは方法としての「時間の克服」を主張したのであろうか。人文事象の歴史的な変化を認めながら、研究の目標として不変のもの、繰り返し現われる傾向を提唱するに到る背景は何か。この問題はシュリユーター地理学の理論的基礎に関する重要な問題であり、かれの評価の最大ポイントの一つである。シュリユーター批判の焦点の一つがここにあったことは既に言及した。この問題に答えるためには、「歴史」とは何か、「法則」とはいかなるものか、といったより基本的な問題が十分捉えられていなければならない。しかしそれは今の筆者には不可能に近い。本項では、かれが「時間の克服」を導入した意図、その背景について簡単に論じておこう。

前章で論及したように、シュリユーターは人文地理学の研究対象を「地域」の景観像に設定し、景観現象の類型的な分類を究極の課題にした。そのばあい「景観」は、その形成要因と因果的、統一的に把握されねばならない、というのが彼の方法であった。現にかれは「景観」の因果的説明に当って、「自由な手法」、すなわち要因の多元的な追求に努めたが、このような自由で、無限定的な要因の涉猟では、所期の目標である「景観」の類型化―因果関係をも含めて―は不可能に近い。類型化のためには、全般的な、あるいは一群の景観現象に働いている一般的な因果関係の説明が必要だろうからである。この事情は地誌研究に於ても同じであって、ある領域の現象を多元的にでなくて一つの要因、普遍的な因果関係によって説明したい。形成要因との関係を含めた「景観」の類型化、更には特定領域の景観現象の一般的説明、そのためには景観現象を常に規定している不変の要因、絶えず働いている因果関係の究明がどうしても必要なのである。当該論文において、北東チューリングンの集落構造の差異を、二つの民族の特性に常に基因させて把握したり、この小領域に展開する諸現象の特質、その歴史的变化を「通過地方」という相対的位置（要因）に帰しているのは、いずれも現象の法則的因果関係の把握を目指したものと言うことができる。また、集落立地の

選定が常に *Neulage* を求めて行なわれるという素朴な命題も、「自由意思を規定する法則」と言えはいえる。シュリューターが「時間の克服」の導入に於て意図したのは、上記のように一般的な因果関係、法則の追求ではなかったか。だが、かれのいう「不変のもの」、「繰り返し現われる傾向」が、はたして社会科学の求める法則なのかどうか。この点には多くの疑問が残るだろうが、その検討は別の機会にゆずりたい。

「時間の克服」を導入した他のより重要な理由は、それが人文地理学の研究課題、対象の特質から必然的に行なわれたというよりも、すこぶる対外的な配慮の産物であった。その導入の意図は、言うまでもなく地理学の一元化・統一ということである。かれは人文地理学を自然地理学の補助イースから解き放って、それに独自性を持たすべく努力したのであるが、他方では両地理学の統一の必要性、その可能性について一片の疑念もいかなかった。いわゆる単一の地理学という考えは、方法論研究の当初から彼の脳裏を離れなかったのである。しかし、集落の具体的な研究に入るやいなや、かれは早速、次のような困難な問題に出会わしてしまう。すなわち、「人間の居住（現象）は重要な箇所にとつて、土地構造物に比較すれば非常に急速に変化する。そのために、二つの現象を一所に観察しようとする地理学にとっては、その結合を実際に成就することは極めて困難である。」自然現象と社会現象とは、いずれも地表を構成する現象―だから単一の地理学に統一できると考えられたのだが―でありながら、二つの現象の変化のスピードには大きな差があるので、両現象を同一の観点から統一的に把握することは難かしい、と言うのである。ここでは単に現象変化の時間的な長短という観点からではあるが、現象の差異が認識されて両地理学の統一に疑問が投げかけられたのである。しかし、かれはこの「困難」を彼独自の方法で、すなわち人文地理学の方法を自然地理学のそれに整約する方向で解決してしまう。かれによれば、「それら二つの現象を、いわば同一の尺度に据えて観察したときには、その結合は可能になる。」では、いうところの「同一の尺度」とは、いかなる視点・方法なのか。かれによると自然地理学の対象、たとえば地形をみると、それは我々の歴史時代ではほとんど不変であり、したがってその

観察方法は無時間的である。だから「たとえば集落の研究のばあいには、研究の主目標を変化のなかで継続するもの、常に繰り返し現われる傾向においた時のみ、それ（同一尺度の設定、すなわち二つの地理学の統一）は可能となるのである。」かれが人文地理学の方法として「時間の克服」を導入したのは、自然地理学と「同一の尺度」を設定して、両地理学の統一を維持しようという意図があったからに他ならない。単一の地理学、両地理学の統一をア・プリオリに、学界の通念にしたがって前提しながら方法論を追及していった彼の態度は、すでに飯塚浩二氏から痛烈な批判を受けている。「時間の克服」の導入は、その内容のいかんを問わず、導入の理論的前提に既に大きな問題を孕んでいたのである。

(D) シュリユーターの蹉跌―結びに代えて― 科学の新しい方法・対象・課題を確立するということは、なんと至難の作業であることか。それはなによりも研究主体を取りまく学界状況、既存の通念などからの影響を、意識的・無意識的に受けるからである。かれが人文地理学の独創的な方法論を一人模索していった時代、世紀の交わり頃の学界は自然地理学万能の時代であった。ベルリン留学時代の彼が、ラッチェルを批判しながら新しい人文地理学を樹立していく過程で、常に模範にしたのは確固とした基礎の上に華々しく展開していた自然地理学であった。そこから分岐してまもない人文地理学の蓄積は、なお微々たる量でしかなかった。このような状況を考えれば、かれが常に自然地理学に方法論的根拠を求めていったのも、また両地理学の統一を念頭においたのも無理のないことであった。ベルリン移住後、専ら自然科学のアカデミシャンとの交流の中で成長した彼には、社会科学の巨匠たち、K・マルクスは言うに及ばず、M・ウェーバーでさえも恐らくかれの射程距離には入らなかったと推察して間違ひなからう。顔は常に自然地理学に向いていたのである。人文地理学を独立科学にするにしても、地理学の統一、単一の地理学の実現ということは、侵すべからざる大前提であった。この前提の上にかれの全理論は構築されていた、と言っても過言ではあるまい。文化景観を考察対象に設定したのも、自然地理学と類似の対象を持たねばならないという信念が背後に

あったし、今みたように「時間の克服」の導入にしても、やはり「両地理学の統一」を意図して行なわれている。景觀現象の絶えまない変化を認めながらも、その変化を積極的に追求することなく、当時の地形学に範をとって時間的モメントを捨象しようとしたのは、なによりも地理学の統一という学界の通念が強力な背景として存在していたからに違いない。この意味でかれの「無時間性」の主張を批判した飯塚のつぎの言葉は、たしかにシュリユーター地理学の基底にまで突きささる。「同一の基礎におくことができるのかどうか、同一の指導的観点からみることが可能なのかどうか。それを現実そのものから読みとろうとする、という論法ではなくて、先験的に学問の特定の型が予定されているかのような倒立ちした論法である。」<sup>(24)</sup>

シュリユーターが究明しようとするのは、なによりも土地自然を生活舞台にして多様に展開される人間生活の実態、それも抽象的な人間ではなくて、きわめて具体的な人間の生活であった。それは自然に働きかけて耕地を造り、家を建て道路を走らせ、工場・商店・公共施設などの種々の生産手段・生活施設を造営しながら、自己の生産を続ける生身の土臭い人間集団の生活実態である。かれはこの生き生きと活動する具体的な人間活動を、「地域」を通して把握しようとする。かれの「地域」とは、人間が自己の生活のため土地に働きかけて造出した文化的・社会的・経済的な創造物の複合体である。自からの目的のために造出し利用している地的生活手段、それからなる「地域」の実態、その形成メカニズムが把握できれば、社会の実態の一面が捉えられるというものである。かれは「地域」を相観的觀察法によって、すなわち「景觀」によって把握する方法を樹立した。いわゆる「景觀地理学」である。

ところで、科学的な認識は、客観的に実在する実体の漸進的な解明によって深化されるが、その実体認識の程度は、用いられる觀察方法に強く依存している。かれは実体としての「地域」―地的構成物の複合体―を相観的觀察法によって、換言すれば、実体を「景觀」として認識したのである。だが、いま対象をかれの「地域」に限ってみても、感覚に反映される形態特徴、「景觀」によっては「地域」は決して十分に把握されたとは言えない。その方法で



は実体認識に大きな限界があるのである。「地域」は更に「機能」としても、「価値」や「資本」としても把握されるからである。「景觀」の因果的解明にしても、「景觀」というレベルの把握に止まっている限り、その実体の解明は皮相なレベルに終わるを得まい。それに止まる限り、「地域」や「景觀」から階級性や歴史性が捨象されてしまう。古代の王も中世の領主も、近代の大企業主も等しく景觀形成者として整約される。これでは、「地域」を編成し利用しながら生活する社会のヴィヴィッドな実態は、とうてい把握できないに違いない。

社会が造り出し利用する地的構造物とその複合体の因果的解明を通して、すなわち「地域」を形成要因と統一的に把握することによって、歴史的社會の実態を具体的に捉えようという方法・課題はシュリユーターのものである。我々は今日、「地域」を「景觀」として把握することを越えて、「機能」や「資本」として捉え、生産関係等との因果を解明しようという地平にまで到達している。かれの批判的継承の一つの方向は、この地平に違いない。「地域」とは無縁に、生産関係・文化・政治・経済等の諸現象を考察することは、人文地理学のリーゾンディーテルを自から損うことにならないだろうか。人文地理学に個有の方法・対象・課題を付与して、それを独立科学に育て上げることが、シュリユーターの生涯の念願であった。この点で、かれに学ぶべきことは少なくともなさそうである。総合化の前提としての分科の独立、それは地理学においては未だ十分に達成されているとは言えないのだから。

シュリユーターは一八七二年十一月十二日、ルール地方のヴィッテンに弁護士・公証人の息子として生れ、一九五九年十月十二日、第二の故郷たるザーレ河畔のハレで死亡した。それは畢生の努力を傾けた研究『先史時代における中部ヨーロッパの居住領域』の公刊が完成した翌年のことであった。今年にシュリユーター生誕百年に当る。今日、かれの名は世界の地理学者の記憶から消え去ろうとしている。だが、かれを簡単に学史上の一人物に封じ込めてよいものかどうか。かれに学ぶべきことはもはやないのか。この小論は、このような素朴な疑問から出発しそれに答えようとしたものである。このささやかな小論を、生誕百年の記念として、シュリユーターの靈に捧げたいと思う。

(一九七二年十一月十二日)

## 注

- (1) 簡単に要領よくまとめられたシュリユーター紹介としては、次の諸論文がある。水津一郎「シュリユーターと文化景観の形成」(『地理』八一・二(一九六三年))。R. Kauler, Otto Schlüters Bedeutung für die geographische Wissenschaft (*Die Erde*, Bd. 95, 1964), S. 5~15. R. E. Dickinson, *The maker of modern geography* (London, 1969), pp. 126-135. シュリユーター地理学を最も詳細に検討した論文として、シュリユーター学派と自称するラウテンザムの次の論文がある。H. Lautensach, Otto Schlüters Bedeutung für die methodische Entwicklung der Geographie (*Petermanns Geographische Mitteilungen*, Bd. 96, 1952), S. 219-231.
- (2) O. Schlüter, *Die Ziel der Geographie des Menschen* (München u. Berlin, 1906). 国松久弥訳著『人文地理学と文化景観』(共立社・昭和五年)の第一部。綿貫勇彦訳著『地理学方法論』(地人書館・昭和十年)の第一篇。O. Schlüter, Die Stellung der Geographie des Menschen in der erdkundlichen Wissenschaft (*Geogr. Abende im Zentralinstitut f. Erziehung und Unterricht*, H. 5, Berlin 1919). 国松久弥『前掲書』第二部。綿貫勇彦『前掲書』第二篇。
- (3) O. Schlüter, Die Siedlungsräume Mitteleuropas in frühgeschichtlicher Zeit (*Forsch. z. Dt. Landeskde.*, Bd. 63, 74, 110, 1952-58).
- (4) *ibid.*, Siedlungskunde des Thales der Unstrut von der Sachsenburger Pforte bis zur Mündung, 1896. この論文は一九〇二年に改訂補足されて発表された。注(5)参照。
- (5) R. Kauler, *op. cit.*, S. 5.
- (6) O. Schlüter, Bemerkungen zur Siedlungsgeographie (*Geogr. Zeitschr.*, Bd. 5, 1899), S. 65-84.
- (7) *ibid.*, Die Siedlungen im nordöstlichen Thüringen. Ein Beispiel für die Behandlung siedlungsgeographischer Fragen (*Zeitschr. Ges. f. Erdk. Berlin*, 1902), S. 850-74.
- (8) 飯塚浩二『人文地理学』(有斐閣・昭和二五年)の七一頁。
- (9) 奥田義雄『社会経済地理学論攷』(大明堂・昭和四四年)の二〇三頁。
- (10) 森滝健一郎・松田孝「経済地理学の現代的課題と方法」(『経済』昭和四七年五月号)の九四頁。

- (11) 飯塚浩二『地理学方法論』(古今書院・昭和四三年)・八二頁。
- (12) 川島哲郎「経済地域について」(『経済地理学年報』二巻、一九五五年)・三一四頁。
- (13) 奥田義雄『前掲書』二〇四頁。
- (14) 森滝健一郎・松田孝「前掲論文」・九四頁。
- (15) 上野登『地誌学の原点』(大明堂・昭和四七年)・五六頁。
- (16) E. Neef, *Die theoretischen Grundlagen der Landschaftslehre* (Gotha u. Leipzig, 1967), S. 32.
- (17) リヒトホルヘンはライプツヒヒ大学就任講演(一八八三年)のなかで、地理学をはききりと「地表とそれと因果関係にある事物・事象についての科学」と定義した。この中の「地表」Erdoberflächeの語はいろいろ解釈されようが、ラッチェルやヘットナーはそれを自然と解して人文地理学の方法論を展開したとされる。H. Lautensach, op. cit., S. 38-39 参照。
- (18) O. Schlüter, *Bemerkungen zur Siedlungsgeographie* (*Geogr. Zeitschr.*, Bd. 5, 1899), S. 65-84. なお第三章の引用は断りのなごみ終り同論文にもある。短く論文なので頁数は省略する。
- (19) J. Schmitz, *Was ist eine Landschaft* (Wiesbaden, 1963), S. 13.
- (20) O. Schlüter, Ein Beitrag zur Klassification der Küstentypen (*Zeitschr. Ges. f. Erdk. Berlin*, 1924), S. 288-317.
- (21) H. Hahn, Sozialgruppen als Forschungsgegenstand (*Erdkunde*, Bd. 11, 1957), S. 35-41.
- (22) O. Schlüter, Die Siedlungen im nordöstlichen Thüringen. Ein Beispiel für die Behandlung siedlungsgeographischer Fragen (*Zeitschr. Ges. f. Erdk. Berlin*, 1902), S. 850-74. なお第四章の引用は断りのなごみ終り同論文からのもの。
- (23) 綿貫勇彦『前掲書』三四頁。
- (24) 飯塚浩二『人文地理学』(有斐閣・昭和二五年)・七一頁。